



No.27 2004.8.

土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

目次

フォーラム	歴史的遺産の活用と街の再生・門司港地区	中野 恒明 1
地域のニュース	土木遺産と教育活動 ～野蒜築港と高校教育	佐藤 明嘉 3
土木史ニュース	古市公威 生誕 150 年をめぐる動き	松浦 茂樹 4
学会の動き	第 24 回 土木史研究発表会報告	樋口 輝久 4
	「土木史研究・論文集 Vol. 24」審査付き論文の募集	北浦 勝 5
	土木学会全国大会学術講演会のご案内	知野 泰明 6
	土木史フォーラム小委員会平成 16 年度委員名簿	6
文化財ニュース	文化財となった土木関連建造物等一覧	北河 大次郎 7
		阿部 貴弘
土木史関係図書	魅せられて犀川大橋, 都市をつくった巨匠たちシティープランナーの横顔, パリの橋	横松 宗治 8

フォーラム (特集連載:土木遺産とまちづくり)

歴史的遺産の活用と街の再生-門司港地区

(株)アプル総合計画事務所・代表 中野恒明



はじめに

北九州市の門司港地区の都市再生プロジェクトに関わり、足掛け 17 年。その間の街の変貌ぶりは、様々な新聞・TV・雑誌等のメディアで紹介されてきた。

観光客数は平成 14 年には 340 万人を数え、海を望むマンションは売れ行き好調、全国的な地価下落傾向の中で、横這いもしくは上昇傾向、その意味では「都市再生の優等生」なのである。若者の雇用機会や税収など、地域への経済効果は計り知れないものがある。

門司港は明治 22 年の築港の後、同 43 年からの国直轄による港湾改良工事、さらに大正 8 年から昭和 6 年の第 2 期改良工事と進み、昭和初期には横浜・神戸と比肩する国際貿易港として発展する。多くの歴史的土木遺産や建築物群は当時の繁栄の名残とも言って良い。第 2 次大戦の空襲によって門司港の市街は壊滅的な打撃を受けたが、現存する建物群は堅牢さゆえに焼失を免れ、そして戦災復興土地区画整理による市街地の改造、そして朝鮮動乱の特需による景気を反映してか昭和 30 年代に人口のピークを迎



写真1:埋め立て回避された門司港発祥の土木遺産・第一船溜まり、夜には周囲の建物や水面がライトアップされ、魅力スポットとなっている。
(照明計画・石井幹子デザイン事務所+協力・アプル)

えている。昭和33年には世界貿易産業大博覧会（地元では関門トンネル開通記念の「門司トンネル博」とも言う—現在の老松公園にて）が開催されるなど、時代の先端を走ってきた。

しかし、大陸貿易の途絶の影響、関門連絡船の廃止（昭和39年）、そして日本銀行や主要新聞社、商社の転出が進み、急速に街の衰退を見る。まさにフリーズドライ状態ゆえに、多くの歴史的遺産が残されたことも幸運と言って良いだろう。これらがこの街の再生に一役買うとは、全く予想もされなかったことかも知れない。門司港地区の再生への動きを整理すると次のような流れを読むことができる。

レトロ第一期事業（昭和63年～平成6年）

当時、歴史的建物も老朽化が進み、幾つかが解体の憂き目に、それに市民層からの保存の声、折り良く「ふるさと創生」のふるさとづくり特別事業の支援による保存建物の公共取得・保存改修と歩行者プロムナード整備が始まる。旧三井倶楽部の移築保存、旧大阪商船三井ビルの保存修復はその成果である。

しかし当初計画では近代港湾発祥の地である第一船溜まりの埋め立てが港湾計画にて承認済、それを全面的に見直し、埋め立てを回避した現市長の英断、これ無くして現在の姿はあり得ないと思う。加えて運輸省（当時）の歴史的港湾環境創造事業による緑地整備、その中で赤レンガの旧門司税関の緑地休憩所としての保存修復、そして親水護岸やはね橋、水際プロムナードへと続く。これら一連の保存修復等の環境整備が現在の門司港地区の基盤をつくってきた。

レトロ第二期事業（平成7年～16年）

歩行者の回遊性の向上、魅力ポイントの拡充による滞在時間の延長のための施策が推進されてきた。市によるサイクリングコースやプロムナードの延伸整備やJR九州による九州鉄道記念館（赤レンガの旧九州鉄道本社建物・明治24

年築）、民間の出光美術館（既存倉庫の改修・活用）などが続く。その一環として歴史的港湾である第一船溜まりの水面の周囲のライトアップが進められ、ホテルの宿泊客の増加などの実績を見せてきた。その間に北九州市景観条例に基づく景観地区指定、対岸の下関との関門景観条例の締結などの成果を挙げてきた。

レトロ第三期事業（平成17年～）

都市型観光地としての知名度が定着してきた現在、より完成度の高い街を目指して、レトロ第三期事業とも言うべき「都市再生整備計画」を策定中である。その主眼はウォーターフロントの一角だけでなく、周辺を含めた「生活街・門司港」の本来の街の魅力をアピールすること、それには残された建物群のさらなる保存活用、街中の風情ある建物の保存再生、海峡を望む眺望点や界限散策路の整備、等々、隠れた魅力資源の発掘と活用に力点を置いている。

おわりに

門司港の現在の姿は計画当初の廃れた風景とは、隔世の感がある。多くの第一線の専門の方々から、現地での感想、称賛の言葉を戴くことも少なくない。やはり時間の経過に耐えた歴史的建物や土木遺産、これを前面に打ち出し、その魅力度を引き出したことが、成功の要因と思う。行き過ぎた“観光”も否定できないのは事実だが、これは地元の期待の大きさを物語っており、これも淘汰されるに違いない。行政によるハードな舞台づくり、それに地元の企業、市民による様々なソフト事業の展開、この両輪が旨く噛み合っていることも大きな強みでもある。是非とも、ホームページ上で「門司港レトロ」を検索されることをお勧めしたい。地元の方々の歴史的遺産をまもること、まちづくりに参加することの喜び、それに訪れた人々との交流の姿が伝わるはずである。私も引き続き“まち医者”として関わって行きたいと思っている。



写真2：日比谷公園の設計者と呼ばれる本田静六設計の清滝公園（大正5年竣工）、関門海峡の眺望点の一つ。残念ながら昭和28年の大水害により破壊され、後に修復されたものが現存。



写真3：保存活用が検討されている旧大連航路上屋一号倉庫・国施設（竣工：昭和4年、大蔵省営繕官財局・大熊喜邦）、RC造アールデコ装飾。当時は税関業務・倉庫・乗船施設として使われていた。

地域のニュース

土木遺産と教育活動 ～野蒜築港と高校教育

(身近な土木遺産をテーマとした総合学習の試み)

宮城県石巻工業高等学校 土木システム科 教諭 佐藤 明嘉

はじめに

本校は、宮城県北東部の人口約11万8千人の宮城県石巻市西部に位置し、昭和38年4月開校そして平成14年に創立40周年を迎え、5学科(機械制御科・電気情報科・土木システム科・化学技術科・建築科)18クラス(720名)の専門(工業)高校である。生徒の進路先は、おおそ就職6割、進学4割を推移し就職希望者の内定率はほぼ100%である。また、学校の近くを大河北上川が流れ、国の重要文化財に指定された石井閘門および北上運河が近接し土木選奨遺産に選定された野蒜築港まで北上運河を介して約13kmと近代土木遺産に恵まれた環境下にあるのも、これから紹介する教育活動を実践するうえで大きな要素となったことは自明である。

土木遺産(野蒜築港群)を取り巻く環境・出会い

私は、この恵まれた環境をぜひ学習の場に何らかの形で活用したいという思いがいつも脳裏にあったが、なかなかその機会を見いだせずにいた。また、石巻市・矢本町・鳴瀬町に跨る野蒜築港群についてそれぞれの地域の小・中学校にて全くと言っていいほど学習の機会が無く生徒の興味・関心の度合いも非常に低い状況であった。例えば、石井閘門を例に挙げると、なぜ閘門の名称が石井閘門というのか疑問にも思っていない、さらには北上運河をこれまで貞山運河であると思っていたなど日常の関心の低さが目につくことも多く、生徒たちからの積極的な動きは感じられなかった。ところが平成10年11月に大きな転機を迎えることになる。「野蒜築港120年委員会(土木学会東北支部)」主催の野蒜築港120年フォーラムが地元鳴瀬町にて開催され、翌11年6月には鳴瀬町立浜市小学校にて野蒜築港120年シンポジウムが開催され、町内外より多数の参加者が訪れ、関心の高さを肌で感じ、この出会いを機にいよいよ野蒜築港をテーマとした教育活動がスタートすることになる。

教育活動の紹介

活動の主体は、土木クラブ所属の生徒が中心と

なりその他に土木遺産(野蒜築港群)に興味・関心のある生徒そして地元鳴瀬町在住の生徒達である。そこで以降はそれらの主な取り組みを紹介する。

《平成11年度》

- ・野蒜築港跡地の測量調査(12月～3月、結果については野蒜築港120年フォーラム報告書(2000年3月)に掲載)

《平成12年度》

- ・日蘭400周年記念野蒜築港交流会(4/18)参加
- ・野蒜築港120年シンポジウム(6/24 鳴瀬町立鳴瀬第二中学校)にスタッフとして参加協力(7名)
- ・鳴瀬町立浜市小学校6年生の総合的な学習の時間の支援
- ・野蒜築港120年フォーラム(11/25 鳴瀬町)にて成果発表(2グループ)

《平成13年度》

- ・鳴瀬町立浜市小学校6年生の総合的な学習の時間の支援(市街地の測量と授業のスタッフとして3日間)及び連携(フォーラムにて共同発表)
- ・平成14年度以降については、石井閘門の測量調査を実施。

波及効果

野蒜築港120年フォーラム(平成11年11月20日、東北大学会場)にて私の「土木遺産を教材とした総合学習の取り組み」に対する紹介が縁で、土木学会東北支部が全面支援のもと「次世代を担う若き土木技術者の育成」事業が12年、13年の2ヶ年にわたり計13回、産・官・学の方々による授業が行われた(土木学会誌14年8月号に紹介、この事業の報告書については宮城県石巻工業高等学校に問い合わせ下さい)。

おわりに

土木遺産を地域のみなさんに知っていただくと共に次代への継承と保存活用が重要と考えられる。そのためにも学校における教育活動が地域のみなさんへと波及し、生涯学習のテーマとなることを願い、今後も微力ながら活動の発信を行っていく所存である。多くのみなさまのご理解とご協力を今後ともよろしくお願い申し上げます。



写真1 鳴瀬町立浜市小学校6年生と石巻工業高校土木クラブの生徒による市街地(野蒜築港跡地)の測量にて



写真2 野蒜築港120年フォーラムにて共同発表(H.14年2月22日 鳴瀬町立網学等にて)



写真3 土木クラブメンバー

古市公威 生誕 150 年をめぐる動き

古市生誕 150 年記念企画小委員長 松浦茂樹(東洋大学)

本年は土木学会初代会長・古市公威の生誕 150 周年にあたるとともに、土木学会創立 90 周年にあたる。土木学会図書館委員会では、90 周年記念行事の一環として、「古市公威とその世界」のパネル展を企画し、本年 5 月末の土木学会総会で御披露目を行った後、土木学会図書館前で展示を行った。その後、9 月に愛知工業大学で行われる平成 16 年度全国大会第 59 回年次学術講演会で、展示とトークショーを行う予定である。

さて、初代会長・古市公威について、我々はどれ程のことを知っているのでしょうか。その知識は以下のことであろう。

第 1 回文部省国費留学生としてフランスにわたり、エコール・サントラル、パリ理科大学を優秀な成績で卒業した。帰国後、帝国大学工科大学初代学長となるとともに、兼任で内務省土木局長・土木技監を歴任した後、鉄道分野で活躍した。また工学界で初めて爵位を授与され男爵となった。さらに第一回の土木学会総会において「指揮者ヲ指揮スル人即所請將二將タル

人ヲ要スル場合ハ土木ニ於テ最多トス」と、工学の王者としての土木工学の総合性を主張したことを記憶している方もいよう。しかし、古市がトータルとしてどのようなことを行ったのか、また社会に対しどのような役割を果たしたのかについて、体系的に研究・評価されることはほとんどなかった。現在、土木図書館委員会・土木史研究委員会では小委員会を設立して「古市公威とその時代」の 11 月出版に向け、鋭意、努力中であるが、その成果の一部を今回、パネル展示したのである。ここでは、これまでほとんど知られていなかった資料も展示している。たとえば古市が作成した「豊平川水害防御計画」である。フランス式の美しい図面で、古市がフランスで修得した作図技法が見て取れる。また孫文の中国国土計画図、工学院大学に定置されている朝倉文夫作「古市公威像」などである。

「持続可能」な発展が求められている今日、古市研究を通じて、土木とは何か、土木技術者のあるべき姿とはどのようなものなのかを考えるヒントが得られれば幸いと考えている。

学会の動き

第 24 回 土木史研究発表会報告

第 24 回土木史研究発表会が 7 月 3 日(土)・4 日(日)の両日、岡山大学環境理工学部で開催された。

過去 10 数年間で最も遅い開催日となり、梅雨時の最高気温 35.4 (3 日)という蒸し暑い中、131 名の参加者があった。

講演発表は 60 件あり(欠席 1 件)、15 分間の質疑応答では白熱した議論が展開し、時間が足りなくなる場面も見られた。特に若手発表者には、厳しい質問とともに貴重なアドバイスもあり、審査付き論文への投稿、今後の展開に強い期待が寄せられていることが感じられた。

今回の発表会では、プロジェクターによる発表を全面的に認め、事前に案内を行ったところ、PowerPoint による発表が 44 件あり、全体の 7 割以上を占めた(ちなみに OHP は 13 件、その他 3 件)。そのため、動きのあるビジュアルなプレ

ゼンテーションとなり、わかりやすく、興味深いものが多かった。幸い、心配されたプロジェクター機器のトラブルはなかったが、各自のパソコンの設定・接続等で開始が遅れ、質疑応答の時間が短くなった発表が見受けられた。

なお、昨年課題となった空きコマ、欠席対策として、馬場俊介岡山大学教授による「岡山の近代化遺産」および「神戸堰」の 2 件の番外発表があった。見学会は開催されなかったが、涼しい会場で 100 件以上の岡山の近代化遺産を見ることができた。また、神戸堰“再現”の紹介を通じて、今後の土木遺産の保存のあり方についても議論が行われた。

懇親会は、17 時 30 分から大学内の福利施設で行われ、69 名の参加申込があった。

(岡山大学 樋口輝久)

「土木史研究・論文集 Vol.24」審査付き論文の募集 【原稿締切：9月30日（木）必着】

土木史研究委員会副委員長 北浦 勝(金沢大学)

土木史研究委員会(委員長:伊東 孝・日本大学教授)では、土木史研究発表会の講演用論文を対象として、「土木史研究・論文集 Vol.24」の審査付き論文を下記のように募集いたしますので、奮ってご投稿下さい。土木史研究の審査付き論文の投稿方式は昨年度から全面変更となり、土木史研究発表会でご発表いただき(一次審査)、そのときに出された色々な意見・助言をもとに「審査付き論文」としてまとめていただく形となっております。従いまして、土木史研究発表会でご発表いただいていない論文は審査の対象となりませんので、くれぐれもご注意ください(講演集に掲載されていても口頭発表の行われなかった論文は審査の対象とはなりません)。

1. 論文審査の申込み

第24回土木史研究発表会もしくはそれ以前の研究発表会で発表された講演用論文を、発表会での討議等をもとに内容を充実させ、下記2.の提出方法に基づいて審査付き論文として提出して下さい。使用言語は日本語または英語とします。題目、著者名等の変更、あるいは、複数論文の合体等は可能ですが、発表内容と著しく異なる論文は、発表会の場が論文の一次審査の場であることから、審査対象とならない可能性があります。また、他の論文集(審査付き論文集だけでなく、無審査でも著名な学術雑誌)と内容が重複するような論文の投稿は禁じられています。ただし、昨年同様、1人何編でも第1著者として投稿できます。

論文の著者には、1 投稿論文につき論文集1冊を無料配布いたします。論文集と講演集は別個に購入できるようにする予定です。なお、論文集を1冊以上ご希望の場合、事前予約はEメールでも受け付けます。その際は、書名(土木史研究・論文集 Vol.24)、購入部数、氏名、送付先住所、会員区分、電話番号、請求書宛名を明記の上、事務局(hashimoto@jsce.or.jp)宛にお送り下さい。

2. 審査用論文の提出方法

提出締切:2004年9月30日(木) 必着(注1)

論文送付書:A4判の用紙に自由書式で、以下の項目について記載し送付書とする。

論文名、主著者名・所属・学会員の種別及び会員番号、連名者名・所属、連絡先(住所、電話、Fax または e-mail アドレス)、審査部門(下記 注2参照)、発表会の名称及び講演番号・論文名・著者名、発表時の講演論文からの継承性について(下記 注3参照)、掲載料の支払方法(郵便振替、現金書留、銀行振込)、別刷部数、論文集の事前予約(する、しない)を明記のこと(請求書式に指定がある場合はその旨も明記)。

提出方法:本原稿を1部、原稿コピーを4部(A4判、1部ずつホッチキス左上止め、両面可)をA4判封筒に入れて提出のこと(1封筒に1セット)。なお、提出は郵送のみとする。

提出先:(社)土木学会 土木史研究編集小委員会

〒160-0004 / 東京都新宿区四谷1丁目無番地

Tel:03-3355-3559、FAX:03-5379-0125

頁数:最大20頁 審査料:1編10,000円 掲載料:3,500円/頁(例:9頁ならば、9頁×3,500円=31,500円)

別刷料:別途請求(50部単位)

注1)提出締切は必着です。注2)論文送付書に記述する審査部門につきましては、次の4つの部門の中から原則1つ(複数選択も可とします)を選んで下さい。a. 史実部門 b. 解釈部門 c. 萌芽部門 d. 重点部門
a. 史実部門は、今まで公開されなかった一次史料をもとにした「新発見」の事実を披瀝する論文です。b. 解釈部門は、二・三次資料を活用しつつ、従前の研究を新しい解釈で再構築する論文です。一部のa.を基礎に、主としてb.を行っている論文は、「b」あるいは「aとb」と記載してください。c. 萌芽部門はユニークで全く新規な切り口の論文。d. 重点部門は土木遺産の保存・活用、あるいは、評価法にかかわる論文です。送付書に記載する審査部門は、上記の4部門の中から1つないし複数を選択・記入してください。

注3)論文送付書に記述する「継承性」については、下記のa. ~ c. の中から該当するものを1つ選んで記載して頂き、別紙添付書類として、「発表会時に受けた質問の内容、それに対する回答」を記述して下さい(審査時の資料といたします)。

a. 継続:発表会の講演論文を元に(80%程度)、質疑応答時の意見を反映させた。

b. 分割:発表会の講演論文の一部に、質疑応答時の意見を反映させて執筆した。

c. 統合:発表会時は、2本の関連した講演論文であったものを、質疑応答時の意見を反映させて1つに統合して執筆した。

注4)提出する原稿コピーの著者名等はそのままで結構です(事務局で、消去した上で査読者に送付します)。

3. 審査付き論文の作成方法

土木史研究編集小委員会が決定した執筆要領に基づき、A4判の用紙(左右 210mm、上下 297mm)を使用し、ワ・プロ・タイプにて印字して下さい。なお最終的に採用された場合、原稿はそのままオフセット印刷しますので、特に図表等は縮小しても充分読みとれるよう、注意して作成してください。

4. 審査方法

土木史研究編集小委員会で審査を行います。審査の判定は、第1回判定(12月中旬)で採用、軽度の条件付採用、重度の条件付採用、不採用の4ランクに分けます。このうち条件付採用の論文については、軽度か重度でその内容に程度の差はありますが、修正結果を見て採否を判定します(4月)。採択された論文は「土木史研究・論文集 Vol.24」(2005年6月刊)に掲載されます。

5. 送付先および問合せ先 土木学会土木史研究編集小委員会 (担当職員:橋本剛志)

〒160-0004 東京都新宿区四谷一丁目無番地 Tel:03-3355-3559/FAX:03-5379-0125、E-Mail: hashimoto@jsce.or.jp

土木学会全国大会学術講演会のご案内

土木史研究委員会では、今秋、開催の平成 16 年度土木学会全国大会の学術講演会において以下の特別セッションを企画しました。今後の土木史教育のあり方を大いに議論するため、学術講演会ながら討論会となるよう斬新な進行を計画しております。古市公威のトークショウと共に、ふるってご参加ください。詳しい内容、スケジュール等につきましては土木学会ホームページにてご確認ください。
(<http://www.jsce.or.jp/>)

日時: 2004 年 9 月 8 日(水) 9:00 ~ 12:15

会場: 愛知工業大学 8 号館 201 号室

セッション名: CS-6 土木史教育 - 講義と教材(1)、(2)

座長: 小林一郎(熊本大学)

主旨: 工学倫理教育あるいは継続教育等の関連も含め、今後の土木史教育はいかにあるべきかを論ずる。前半の「講義」セッションでは、すでに開講中のシラバスの紹介・講義の方向性、今後の構想などの発表を、後半の「教材」セッションでは、教官の歴史観に従って各自が準備するという前提の、大半の学生が共有できる副読本(継続教育関連の試験対策にも利用可能なもの)についての発表などを通して議論を深めます。

《発表内容と講演者》

CS - 6 土木史教育 - 講義と教材(1) / 9:00 ~ 10:30

CS6-001 土木史(新潟大学)の授業概要について / 新潟大学 大熊 孝

CS6-002 「土木史」の講義の現状 / 日本大学 藤田 龍之

CS6-003 岡山大学における土木史関連講義 / 岡山大学 馬場 俊介

CS6-004 「国土環境形成史」講義について / 信州大学 小西 純一

CS6-005 土木史教育 - 講義と教材 / 日本大学 伊東 孝

CS6-006 「土木史教育」に求めるもの / 鹿児島大学 吉原 進

CS - 6 土木史教育 - 講義と教材(2) / 10:45 ~ 12:15

CS6-007 新しい土木史教材『図録土木史年表(仮称)』の作成について / 足利工業大学 為国孝敏

CS6-008 土木史年表の一試案 特に河川改修史について / 日本大学 知野 泰明

CS6-009 土木史教材 - 道路編 - の作成について / 北海道開発技術センター 原口 征人

CS6-010 土木史教育における電気事業の位置づけ / 岐阜大学 田中 尚人

CS6-011 水道の近代計画設計史に関する教材の検討について / 近畿大学 岡田 昌彰

CS6-012 土木史教育の必要性和教材のあり方 / 東京大学 中井 祐

(日本大学 知野泰明)

土木史フォーラム小委員会平成 16 年度委員名簿

委員長	横内 憲久 (日本大学)	地域委員	安達 實 (真柄建設㈱)
幹事長	知野 泰明 (日本大学)		有井 宏子 (大阪府教育委員会)
常任委員	阿部 貴弘 (パシフィックコンサルタンツ㈱)		岡田 昌彰 (近畿大学)
	岡田 智秀 (日本大学)		木村 一裕 (秋田大学)
	橋本 光行 (JFE エンジニアリング㈱)		田中 邦博 (九州共立大学)
	日野 智 (秋田工業高等専門学校)		田中 尚人 (岐阜大学)
	榊山 清人 ((財)全国建設研修センター)		樋口 輝久 (岡山大学)
	山田 圭二郎 (セントラルコンサルタント㈱)		松山 正将 (東北工業大学)
	横松 宗治 (㈱日本ランドデザイン)		宮本 裕 (岩手大学)

文化財ニュース

文化財となった土木関連建造物等一覧

重要文化財 (平成16年4月答申分)

所在地	名称	建設年代	特徴
新潟県新潟市	萬代橋	昭和4年	田中豊などの指導のもと福田武雄が設計。充腹された躯体側面全体に花崗岩を施す重厚な外観を呈しながらも、鈍重に陥らず、連続アーチの律動感が巧みに表現された近代橋梁。また建設当時、RC構造物としてわが国で最大支間を実現した土木構造物で、大規模構造物建設の技術的達成度を示す。
熊本県八代市	旧郡築新地甲号樋門	明治34年	明治の干拓事業として有数の規模を誇る八代海干拓事業の代表的遺構。わが国に現存する組積造樋門として最大規模を有する貴重な土木構造物であるばかりでなく、樋門壁面の切石積に巧緻な石積技術が発揮された、技術的完成度の高い明治を代表する干拓樋門。

登録有形文化財 (平成16年6月答申分)

所在地	名称	建設年代	特徴
神奈川県伊勢原市	八段堰堤	昭和3年	内務省直轄の花水川流域砂防工事の一環として建設されたもので、渓流砂防の基幹的施設。いずれも重力式練積堰堤で、丸みのある水通しが特徴的。
	元滝堰堤	昭和5年	
	袋町堰堤	昭和4年	
神奈川県箱根町	出山堰堤	昭和4年	内務省直轄の早川流域砂防工事の一環として建設された。特に出山堰堤は、堤高20mの大規模構造物。
	観音坂堰堤	昭和5年	
富山県庄川町	庄川合口堰堤	昭和14年	わが国屈指の大扇状地の礫波平野を潤し、穀倉地帯の近代化を支えたRC造堰堤。
福井県三国町	眼鏡橋	大正2年	アーチ端部を鋸歯状の段差仕上とした、ねじりまんぼの煉瓦造単アーチ橋。
福井県今庄町	アカタン砂防大平ミズヤ上堰堤	明治30年代	赤谷川上流域に県事業で建設され、「アカタン砂防」の名で親しまれる砂防堰堤。空石積堰堤が主で、溪岸の浸食と崩落を防ぐ。溪床勾配の緩和に効果を発揮することで、周囲の自然緑化を導きつつ、それらと一体になった落水の景を創り出している。八号堰堤は堤長112mの大規模な土堰堤で、松ヶ端堰堤と奥の東堰堤は導流堤を連結した堅固なつくりの大規模石造堰堤。大平ミズヤ下堰堤は、延長約61mの段状の石張流路工を接続する。
	アカタン砂防大平ミズヤ下堰堤	明治30年代	
	アカタン砂防大平中堰堤	明治30年代	
	アカタン砂防大平ナベカマ堰堤	明治30年代	
	アカタン砂防大平口堰堤	明治30年代	
	アカタン砂防松ヶ端堰堤	明治30年代	
	アカタン砂防奥の東堰堤	明治30年代	
	アカタン砂防八号堰堤	明治30年代	
京都府大山崎町	アカタン砂防九号堰堤	明治30年代	
	大山崎山荘・洞(トンネル)	昭和初期	山荘への進入路に設けられたフラットアーチ形の煉瓦造トンネル。
兵庫県神戸市	旧神戸居留地煉瓦造下水道	明治2～4年	卵形管と円形管からなるわが国最初期の下水道施設で、英国人ハートの設計。
鳥取県関金町	清水川第二堰堤	昭和13年	昭和9年の室戸台風後、内務省直轄で天神川水系清水川に建設された砂防堰堤。いずれも谷積を主体とした重力式練積堰堤で、水通しの天端一層分を布積とするのが特徴。良好に残る石積の外観が周囲に回復された緑とよく調和している。
	清水川第五堰堤	昭和14年	
	清水川第一堰堤	昭和12年	
	清水川第六堰堤	昭和19年	
	清水川第三堰堤	昭和13年	
	小鴨川第二号堰堤	昭和17年	

(文化庁 北河大次郎 パシフィックコンサルタンツ 阿部貴弘)

書 名	著者・編者	発行所・発行日	定価（本体）
魅せられて 犀川大橋	国土交通省北陸地方整備局 金沢工事事務所監修	（社）北陸建設弘済会 2002 年 10 月	無料
金沢市内の名橋犀川大橋が未だ木橋であった明治 40 年から、コンクリート橋を経て、現在の鋼トラスに至る変遷を豊富な写真資料と図面などで記録する。			
都市をつくった巨匠たち シティープランナーの横顔	（財）都市みらい推進機構編 新谷洋二/越澤明監修	（株）ぎょうせい 2004 年 3 月	¥ 3,500
19 世紀中期のパリを改造したオスマン、20 世紀当初の英国田園都市を担ったハワードなど、近代都市計画の創始者たちから、現在の計画方法を確立する米国の巨匠たちまで、そしてわが国の先駆者の業績も挙げられ、近代都市計画の輪郭を描いている。			
パリの橋	渡辺 淳	丸善	¥ 2,415

（日本ランドデザイン 横松宗治）

編集後記 今年の夏はこれまで経験した中で一番暑い！でも、この暑さの中でがんばる高校球児やアテネで世界を相手に戦うオリンピック選手を見ていると「夏バテ～」なんて言えませんか(^_^;)。さて、平成 12 年度より本編集委員を 4 年間務めさせて頂きましたが、新委員にバトンタッチすることになりました。この委員会を通じて専門以外の方々と接点を持つことができ、非常に有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。これからも必須科目として「土木史」と接点を保ちつづけることになるかと思えます。最後に、土木史に関する専門的な知識が乏しく、3 代の委員長始め委員の皆様にご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。（橋本光行）

土木史フォーラム No.27

監 修：土木学会土木史研究委員会
 発 行：土木史フォーラム小委員会
 代表者 横内 憲久（日本大学）
 事務局：日本大学理工学部 岡田 智秀
 〒274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1
 TEL&FAX.047-469-5427(直通)
 Email：t-okada@ocean.cst.nihon-u.ac.jp
<http://wf.ocean.cst.nihon-u.ac.jp/>
 印 刷：（株）青孔社

CONTENTS

-FORUM	The Port of Moji~ City planning with the Best Use of its history and landscape	NAKANO Tsuneaki	1
-LOCAL NEWS	Civil Engineering heritages and education ~Nobil port and high school education	SATO Akiyoshi	3
-NEWS	150 years anniversary for the birth of Kimitake Furuichi	MATSUURA Shigeki	4
-REPORT FROM CHSCE(Committee on Historical Studies in Civil Engineering)			
	Report of 24 th conference of CHSCE	HIGUCHI Teruhisa	4
	About the revision of contribution regulations in the papers of civil engineering history	KITaura Masaru	5
	Workshop in annual meeting JSCE	CHINO Yasuaki	6
	2004 committee members list		6
-CIVIL ENGINEERING WORKS ON LATEST HERITAGE REGISTRATION LIST			
	KITAGAWA Daijiro , ABE Takahiro		7
-BOOK GUIDE		YOKOMATSU Muneharu	8

編集委員会 委員長：横内憲久、幹事長：知野泰明

委員：阿部貴弘、岡田智秀、橋本光行、日野 智、榊山清人、山田圭二郎、横松宗治 学会事務局：橋本剛志